

3月号

第418号

創刊 昭和29年7月
題字 鶴木大寿先生

会 報

富山県小学校教育研究会

発行日 令和6年3月

発行所
富山市千歳町1-5-1
(富山県教育記念館)

富山県小学校教育研究会

印刷所 中央印刷株式会社

小教研活動の更なる発展を願って

富山県小学校教育研究会 会長 荒田 修一



令和5年5月8日より、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、「5類感染症」に変更となりました。コロナ禍を乗り越え、本年度の研究調査活動や研究大会では、大きな成果を上げることができました。特に小学校教育課程研究集会では、積極的に主題解明に取り組み、貴重な成果を明らかにして下さった研究推進校及び関係ブロックの皆様へ感謝申し上げます。

研究推進校を巡回した際、私は、それぞれの学校での授業や協議会の充実ぶりを肌で感じながら、内地留学をしたときのことを思い出していました。

私は平成13年度、当時、立教大学の奈須 正裕先生（現在、上智大学教授）の研究室で、3か月の内地留学の機会を得ました。

着任早々、私は研修への期待を込め、先生に質問をしました。

「先生のご研究から、どんなことを学ぶことができるのでしょうか？」

奈須先生の答えは、次のようなものでした。

「何も無いよ。我々は現場の実践から、理論を構築していくのですよ」

授業に密着して研究を進め、実践を通して子供の姿に学ぶことの大切さを、第一に考えていらっしゃる奈須先生だからこそその答えでした。

また、奈須先生がご指導されるたくさんの学校を参観しました。そして、帰りの電車で、奈須先生と授業について率直に議論をさせていただきました。

その中で、見方が狭い私の意見に対して、奈須先生は次のようにおっしゃいました。

いろいろな流儀の授業があるのです。確かに、その中でよりよいものを目指さなければなりません。しかし、本気で子供に向き合っている学校では、子供は確実に育っています。ただ、そこに見られる子供の育ちは微妙に違います。その違いや意味こそ、見ていかなければならないのではないのでしょうか。

この奈須先生の言葉に、子供の育ちに即した授業研究の大切さを考えさせられました。以来、私はこのことを肝に銘じながら、研究を進めたり管理職として校内研修を推進したりしてきました。

そして、この一年、県小教研の会長として研究活動を推進する立場となり、改めて「資料を持ち寄り、子供の姿で語ろう」という、県小教研の合い言葉の意味と大切さを痛感しているところです。

まさに小教研活動は、各ブロックの地域や学校文化の中で育まれた子供の育ちを大切にしています。そして、各ブロックの先生方のアイデアや実践を活かした研究が進められているのです。

小学校教育課程研究集会をはじめとする小教研活動を更に発展させ、他校や他ブロックの先生方との交流を通して、若手からベテランまでが互いに尊重し合い、切磋琢磨する研究活動を推進していきましょう。